

先人の知恵から

27

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

このシリーズは 27 回目を迎えてもまだ「か行」の終わり。スピードアップしようと思いつつも、どうしても伝えたい諺があってなかなか進まないものの、いつかは「ん」に届くと思って続ける。今回は下記の7個。

- 呉越同舟ごえつどうしゅう
- 極楽願わんより地獄作るな
- 虎穴こけつに入らずんば虎子こじを得ず
- 心ここに在らざれば視れども見えず
- 志こころざしは満たすべからず
- 心の仇あだは心
- 心広く体たい胖ふたかなり

<呉越同舟>

敵味方や仲の悪い者同士が、同じ場所に居合わせることのたとえ。また、仲の悪い者同士でも共通の困難や利害のために、協力し合うことのたとえ。呉・越ともに春秋時代の国名。

出典 孫子

母子関係が悪い、父子関係が悪いなど、家族内で関係性の問題を抱えていることはよくある。普段関係の悪い者同士は距離を取るが、何かもっと重大なことが起こると一気に協力体制になることがある。ケースを見ていて、何をやっても上手く行かない

と言われていたケースが、父親が倒れたことで、それまで仲が悪かった母子が協力し合って家族の問題が解決されたり、父母の関係が悪かったのに、子どもの問題が勃発したことで改善されたりと言うことに度々出会う。こうした時にこの諺を使い、昔からこういうことってあると伝え、今の状況が続けられる方法をとともに考えるようにして居る。というのも、問題が解決すると又元の状態に戻ってしまうこともあるからで、そうならないようにするのが我々カウンセラーの仕事である。

英語では・・・

While the thunder lasted, two bad men were friends. (雷が鳴っている間は、二人の悪人どもは友人であった。)

Woes unite foes. (禍は敵同士を團結させる。)

<極楽願わんより地獄つくるな>

死後、極楽往生することを願うよりは、地獄に落ちないように悪行をしない事である。幸福になることを願うよりも、むしろ、不幸になる原因を作らないように心がけよという意。

天国に行けますようにと、一心にお経をあげたり、お祈りをしたりする人はいるだろう。それはそれでよいのだろうが、善行を積み極楽浄土に行けるとするのは多くの宗教で信じられている。人は自分の足元を固めるよりも、良いこと、ラッキーなこと、幸せなことばかりを願ってしまいがちだが、この諺は、それよりも、不幸せなこ

とにならないように気を付けなさいと戒めてくれている。

親や子どもたちにも、上手く行かないことを誰かのせいにして、イライラしたり、怒ったりするのではなく、上手く行くように、よくよく考えて、焦らず一歩ずつしっかり歩めば、結果はおのずとついてくると伝えている。不幸になる原因は、気が緩めば作りやすい。そんな戒めをこの諺が教えてくれる。

<虎穴に入らずんば虎子を得ず>

危険を冒さなければ、大きな利益・功名を得るとはできないというたとえ。虎の子を得るためには危険な虎の住む洞穴に入らなければならないという意から。「虎子」は「こし」とも読み「虎児」とも書く。

出典 後漢書

利益や功名を得ることばかりを考えさせるためにこの諺を使うことはない。むしろ最近の親や子どもたちは、慎重で、臆病で、不安が強い傾向があるため、勇気づけるためにこの諺を伝えている。時には勇気をもって、危ない橋も壊れる前に渡ってみることも大事。

前述の諺と相反するので、使い方は気をつけている。一歩の勇気が欲しい子や親にはこの諺を、慎重に行動してほしい子や親には前述の諺を伝えるようにして居る。

英語では・・・

The more danger the more honor. (危険が大きければ大きいほど、名誉も大きく

なる。)

<心ここに在らざれば視れども見えず>

何事にも心を張り詰め、精神を集中することが必要であるという教え。心が他のことにとらわれていると、じっと見つめても何も見えない。うわの空では何も理解できないということ。出典ではこの後「聴けども聞こえず、食らえどもその味を知らず(耳を澄まして何も聞こえず、食事をしても味がわからないように、物事の正しい判断が出来なくなってしまうのだ)」と続く。

出典 大学

我々対人援助の仕事にいる者にとっても使える諺である。心がうわの空では、人の話は聴けない。傾聴ボランティアや認知症支え合い員講習、教育相談の授業などでは自分自身の体調や精神状態が良くないと人と関わるのはかえってマイナスに働くと話しているが、そんな時にこの諺を出すことがある。

また、子どもたちにも使っていて、食事の時スマホをしながらでは、せっかく母親がつくった料理の味も解らないだろうと説明する。

同様に母親たちにも、スマホを見ながらでは子どもたちの話は聴けないと伝えるのに使っている。親子であれ他人であれ、人と関わるということは、少なからずその相手に影響を与える。そのことをしっかり考えて対応しないと、ボタンの掛け違いが始まり、取り返しのつかないことになるだろう。

英語では・・・

Who so blind as he that will not see?
又は There are none so blind as those who will not see? (見ようとする気のない者暗い者の見分けのつかない者はいない)

<志は満たすべからず>

志を実現させるのに完璧を望んではいけない。程々で良しとしておいた方が良いということ。出典には「おごりは長ずべからず(得意げな気持ちを増長させてはならない)。欲はほしいままに従従にすべからず(欲望を思いのまま満たしてはならない)。志は満たすべからず。楽しみは極むべからず(快樂は極めつくしてはならない)」とある。

出典 礼記

何事も、程々が良い。私のモットーは「適当、程々、良い加減」。したがってこの諺はよく使う。

最近多くの方が、完璧を求めすぎるように感じている。親が子に完璧を求めればそれは子を歪めることになる。また親が自分自身の完璧を求めれば、それは心を病むことになる。元々不完全な人間が、完璧を求めるから無理がある。

茶道の世界では、偶数は嫌い、奇数を良しとする。奇数は割り切れないからである。これは、中国思想による奇数は聖数とされることの影響である。桃の節句や端午の節句等、奇数が並ぶ。陰陽五行思想においても十二支の奇数番目は陽、偶数番目は陰を司る。このため奇数は縁起が良いとされる。

数学で言う「完全数」は現在 51 個見つかっているが全て偶数である。奇数の完全

数は存在しないのではとされている。

不完全と言うのは変化が望める。可能性がある。しかし完全、完璧になってしまったらその先はないように感じる。完了となってしまう。The Endなのである。だからこそ、完璧を求めないのが良いと思う。

この諺の続きの「楽しみは極むべからず」もまた、調子に乗りがちな現代の人間を戒めることになるのではと思う。

<心の仇は心>

自分の心を害する者は、自分の心の中にある迷いの心であるということ。悟りを妨げるものは自分の心の中にある煩惱であるという意。

自分の心の問題は、自分自身が生み出していると考えられる心理の世界であれば、これは当然ともいえる。この諺は悟りのためであろうが、全ての人に知って欲しい諺でもある。精神疾患の保護者が増え、子育ての世界も日々難しくなっている。前述の諺の様に、人々が完璧を求め、コンマ何秒の世界で疲弊しているからでもあるが、そういう世界で自分を通そうとすれば摩擦が起こり、流されれば自分が疲弊するというジレンマのなかにある。

心の中を平静に保つことが出来れば、人々の心は安寧を保てるだろう。自分の心に目を向け、迷いや不安から解放されれば、誰かへの怒りや、自分自身への自責の念、或いは自分の存在への否定感なども消えていくだろう。歳をとってきたら、穏やかに過ごしたいものである。心を穏やかに保つためには、煩惱から自分自身の心を解放

たなければいけない。そんなことを自分を含む高齢のクライアントさんにはこの諺で伝えている。

<心広く体胖なり>

心にやましいところがなければ、身体も又伸び伸びとしてゆったりする。心に何の恥ずべきものもない境地を言う。「胖」は「おおい」とも読む。

出典 大学

子どもが嘘をつくのはよくあること。嘘が上手な子もいて、そういう子にはすっかり騙されることもあるが、どこかで嘘と分かる。一方、嘘が下手な、正直な子は、身体の緊張感や、窮屈そうな雰囲気や嘘と分かる。そんな時に、この諺を伝える。「今、あなたの体はどんな感じかな？ゆったりと伸び伸びとしているかな？」と話しながら、嘘をついたらその嘘を隠すためにまた嘘をつかねばならず、何度も嘘を重ねているうちに、必ずばれるし、ばれてからよりばれる前に嘘を修正した方が良いと伝える。身体の中に正直になろうと。脳は人をだますが、身体は正直だ。身体がゆったりと伸び伸びとして居られるように、心清らかに子どもたちには生きて欲しい。

出典説明

孫子・・・一巻

古代中国の兵法書。著者は春秋時代の呉の孫武

とする説が有力である。「作戦」「軍系」「兵勢」「軍争」「行軍」「地形」など十三編から成る。単なる戦争技術の書でなく、国政・

人事についても触れ、人間の本性に対して鋭い見解を示している。『呉子』とともに、兵法の古典として広く読まれた。

後漢書・・・百二十卷

中国の正史の一つ。南朝、宋の范曄と西晋の司馬彪の撰。後漢一代の歴史を記したもので、本紀（帝王の伝記）・列伝（臣下などの伝記）は范曄の撰に唐の李賢が注を加え、志（社会・文化など）の部分は梁の劉昭が司馬彪の「続漢書」からとったもので注も加えている。志の「東夷伝」には日本についての記述がある。

大学・・・一卷

儒教の経典。「論語」「孟子」「中庸」と共に四書のひとつ。もと五経の一つ「礼記」の一編で、教育の理想と課程を示したものを、南宋の朱熹（朱子）が整理し、三綱領八条目の体形を立てて、身を修めることから治国平天下の教えを説いたもの。

礼記・・・儒教の経典

五経の一つ。前漢の戴徳が収録した「大戴礼」を負いの戴聖が編集しなおして「小戴礼」とし、これが現在の「礼記」となった。周末から秦・漢時代にかけての礼に関する諸説を集めたものであらゆる面に及ぶ礼の記述があり、当時の制度・習俗を知る貴重な資料である。四十九編